

第28回日本環境感染学会総会 感染制御は医療安全の要

徳洲会が22演題を発表

第28回日本環境感染学会総会が3月1日から2日間、横浜市で開催された。一般演題だけで応募が1000題を超えるなど、近年の感染制御意識の高まりを受け、大規模な総会となった。徳洲会グループは22演題を発表、口演（口頭発表）の概要を紹介する。

教育・啓発活動

大隅鹿屋病院（鹿児島県）の田村幸大副院長は、「APICメンバーによる第3者評価受審は感染防止対策加算算定施設における質の向上に繋がる」と題して、APIC（米国感染管理・疫学専門家協会）による審査内容を報告した。まず施設でセルフチェックを実施した後、実際にリスク評価できているかなどを審査員が現地でも評価する。改善箇所は推奨する対策とそのエビデンス（根拠）の文献も教えてくれるため、審査は有意義だと結論付けた。

湘南鎌倉総合病院（神奈川県）もAPIC審査を受けており、鈴木理絵・感染管理部長は「リンクナース主体の部署ラウンドと成果発表を試みて」とをテーマに発表。成長を評価するためリンクナースの部署をICN（感染管理看護師）がともにラウンドし、感染対策順



会場のパシフィコ横浜



多職種による質問が相次ぎ、活気ある議論が展開された

守状況をモニタリングした。結果、各部署の課題が明らかになり、個々のリンクナースの成長も確認できた。

感染管理と対策

岸和田徳洲会病院（大阪府）の野田陽子・臨床検査技師は、「コメディカル・事務系職員への効果的な教育の手法を模索して」と題し口演。コメディカルや事務系職員に月に1回、感染対策講習会を行い、講習会前後と1カ月後に同じ内容のテストを行うことで理解度を評価した。正解率は講習前68・2%から講習後は大幅に上昇、1カ月後の再評価も85%で、講習の効果が認められた。

湘南鎌倉病院の萬淳史・薬剤部医技主任は、「湘南鎌倉総合病院で検出された、MRSAのVCM低感受性株に対する抗菌薬適正使用の評価」を発表。抗菌薬VCM（バンコマイシン）のMIC（最少発育阻止濃度）が2μg/ml（MIC2株）のMRSA（多剤耐性黄色ブドウ球菌）は、VCM以外の抗菌薬の使用が定められている。しかし、調査したところMIC2株感染例のうち抗菌薬を適正使用していたのは23・8%で、VCM低感受性

株は処方医に注意喚起が必要だと訴えた。岸和田病院の深野明美・副看護部長は、「末梢静脈ラインに起因すると考えられた血流感染」をテーマに報告した。同院で発生した4例のMRSA血流感染の原因を調査したところ、環境と手指から類似菌を確認。ミキシング台などの環境整備と末梢ラインの管理、手指衛生を徹底し、培養結果を可視化したことで、感染発生は激減した。

湘南鎌倉病院の若林奈々・管理栄養士は、「クオーストリウム・デフィシル感染患者に成分栄養剤を使用した一例」と題し紹介。経管栄養にともなう下痢は重症であれば、栄養投与療法を中止する。しかしクオーストリウム・デフィシル（下痢などの症状をとまなう菌）による下痢の場合、消化が不要なエレメンタル（成分栄養剤）を使用することで改善することが多い。同院の症

例も改善し、エレメンタルは有効と結論付けた。湘南鎌倉病院の佐藤守彦・感染対策室医長は、「近年増加傾向にある結核について「結核確定診断症例における保健所への届け出の迅速性について」の検討」をテーマに口演した。同院の結核21症例を調査したところ、届け出に平均18・4日かかっていた。結核を疑う症例は早期に必要な検査を行うこと、結核の確定診断法のひとつである胸水中ADA（アデノシンデアミラーゼ）濃度高値症例はICT（感染対策チーム）が把握しておくことなどが必要と提言した。また佐藤医長は、一般演題の座長も務めた。

札幌東徳洲会病院の石塚孝子師長は、「腸管出血性大腸菌による集団食中毒発生時における地域中核病院の役割」と題し発表。地域集団感染例で同院では最終的に26人を受け入れ、さらに地域の施設に赴き感染対策を支援した。他施設と情報を共有できたおかげで混乱がなかったと、日頃からの連携の重要性を強調した。

八尾徳洲会総合病院（大阪府）の山根宣子看護師は、「当院におけるHBVワクチン接種率の現状と接種率向上への取り組み」をテーマに報告した。針刺し事故などでのHBV（B型肝炎ウイルス）感染を避けるため、同院は職員にワクチン接種を実施。新入職員のワクチン接種率が低値だったため、再啓発。追加接種日を設けたところ、2011年の接種率51・3%から12年は64・7%まで増加した。

感染管理部長は審査を機に見直したリンクナース（専門チームや委員会と自部署をつなぐ役割をもつ看護師）の育成プログラムについて「リンクナース教育の充実への取り組み」と題し紹介。自部署で感染対策の講義を行うとともに、リンクナースの9割以上が感染対策を理解したが、行動変容には至らないケースも多く、今後の課題とした。

湘南鎌倉総合病院（神奈川県）の大澤栄子・副看護部長も「リンクナース主体の部署ラウンドと成果発表を試みて」をテーマに発表。成長を評価するためリンクナースの部署をICN（感染管理看護師）がともにラウンドし、感染対策順

として、患者さんを早く治療し、早く帰っていた。だく優しい医療を標榜してまいります」と意気込みを語った。

小児科、外科、整形外科、脳神経外科、産婦人科、リハビリテーション科、放射線科となる予定だ。講演のなかで今村院長は、「山下真・生駒市長の『地域に医療が必要だから病院を展開したい』との熱い思いを受け、徳洲会が生駒市立病院を運営することになりました。同院は高機能型病院

を占めるがんの治療のために、リニアック（放射線治療装置）の導入を決定している。今村院長は、「徳洲会の『生命だけは平等だ』の理念の下に、患者さんにとって医療、エビデンス（根拠）に基づいた医療、無駄のない医療を行います。そのためにも、病診連携を進め、

先生方と共同使用できるようにしていきます」と地域に開かれた医療を展開することを誓った。

講演後、約80人の参加者のなかから「脳梗塞が怖いので、1日も早く病院の開院を望みます」、「リニアックの導入に感謝します」、「災害対策も十分にしてもらいたい」といった声が上がりました。同院に対する期待の大きさがうかがえた。

生駒市立病院の運営構想 オーブン医療を目指す 今村・榛原総合病院院長が講演

「生駒の地域医療を育てる会」は3月9日、近鉄生駒駅前（たけまるホール）で、徳洲会が指定管理者として年内に着工予定の生駒市立病院（奈良県）に関する医療講演会を開催。同院院長に就任が内定している榛原総合病院

（静岡県）の今村正敏院長が講師に立った。同市立病院は2015年3月の開院を計画。建設地は東生駒駅前の駐車場東側で、敷地面積は約5500㎡。一般病床210床で、診療科は内科、消化器内科、循環器内科

かかりつけ医と連携を密に

最先端の医療機器導入の『生命だけは平等だ』の理念の下に、患者さんにとって医療、エビデンス（根拠）に基づいた医療、無駄のない医療を行います。そのためにも、病診連携を進め、

かかりつけ医の先生と共同で医療を行う『オーブン医療』を目指します」と病院の運営構想を披露。さらに言葉を継いで「320列CT（コンピュータ断層撮影装置）や1.5テスラのMRI（磁気共鳴画像装置）、3Dエコー（3次元超音波検査装置）などの高機能医療機器も導入することにな

つており、かかりつけ医

生駒市立病院の概要説明を行う今村院長

熱気に包まれたまま幕を閉じた。

ポスター発表は9演題。発表者とテーマは以下のとおり。▽小毛利理沙・札幌東徳洲会病院看護部副主任「病院におけるClostridium difficile（感染性下痢）の有用性」▽藤澤律子・大和徳洲会病院院長「病院感染対策の評価方法を考える」▽山之上弘樹・静岡徳洲会病院副院長「外国の病院に学ぶ感染予防対策」▽院内感染予防対策を考慮した看護師の技、ナーススキルについて▽黒田浩記・同院検査室副主任「当院のICTラウンドの活動報告」▽崎山昌代・八尾病院副看護部長「当院におけるEPINETを用いた針刺し・切創事故防止対策の見直し」▽萩原一江・同院院長保健所との連携による院内保育所のNovovirus infection outbreakの制圧▽鬼東美紗絵・同院検査室副主任「血液培養採取時のアルコール消毒による汚染率の変化について」▽小原真菜美・同院部長「口腔ケア用の物品管理の見直しによるSerratia marcescens、malophiliaへの介入」▽飯重喜代美・大隅鹿屋病院感染管理部長「病院建て替え前のAPICメンバーによる第3者評価受審の有効性」